

老〜い、どん！ 樋口恵子

それより何より、40年後と言えば、私たちは80代。建築当時（1972年）の日本人の平均寿命は男性71歳、女性76歳でした。私自身の家系で最も長命だった父も70代末に死んでいました。子どものころ結核を病み、その後も決して頑健とは言えない私が、**80過ぎまで生きるとは想像できませんでした。**

私たちは二人とも別の私立大学に勤めており、共に**定年は70歳**。それまで一生懸命働いて、近郊の温泉地に山荘を建て、近くにある歴史の古い有料老人ホームに入る準備をしよう、と話し合ったことはありました。それも夢物語の気分でした。平均寿命が延び続け、「**人生80年時代**」と言われるようになったのは、**1980年代**に入ってからのことです。

世の中は時々刻々と変化し、人の一生も予想どおりにはいきません。まず、老後を共にしようと思っていた相棒が**60代後半に重度脳梗塞**で倒れ、70歳を前に死んでしまったのです。彼の蔵書の整理を、勤め先の大学の先生やお弟子さんがしてくださったことは望外の幸せでした。そして私はその後17年も生き続け、心身はヨロヨロですが細々ながら仕事を続け、本も資料も増えるばかりの日々を重ねました。84歳というのはいつ死んでもおかしくない年齢ですが、とにかくまだ生きていて、ふつうに暮らして、正直、そう早く死にたいとも思わないのです。

築35年ほど経た2007年ごろ、大雨の続いた年があつて、突如、屋根が外れたかと思う雨もりが始まりました。モルタル張りの壁の割れ目からも容赦なく水は流れ込みます。足場を組んでの大修理となり、**270万円**ほどかかりました。定年後の出費ですから、少々心細くもありました。要するに昔のように**人生50年か60年**だったら、こんなことは**起こり得なかった**のです。「**人の寿命が家の寿命を追い抜いて、70代ヒグチの家計は大ピンチ**」とどこかに書いたら、建築家の友人に叱られました。「だから積み立てしておくようにさんざん言ったでしょ。

私は84歳の建て替え引越しを、建物の老朽化、耐震性の欠如を指摘されて、やむなく決意しました。とはいえ、**その家屋も外から見れば十分に体裁もよく、内部を補強すれば、もうしばらく――つまり私が死ぬか施設入居を決意するまで、住み続けることはできたでしょう。**

ですから私の周辺では、賛否両論でした。「やめておきなさい。今さら大変よ。あなた、死ぬわよ」という人が6割。「最後の何年かでもホコリと隙間風の少ないところに住んだらいいわ」とすすめる派のほうが少数派の4割、というところでした。「あなた、死ぬわよ」というのは、何よりも引越しという作業が大変だからです。そして私、本当にちょっとばかり体をこわし、大げさに言うと死にかけました。**老いての引越しをバカにしてはいけません。**

ダブル引越しといっても、**大変なのは旧居から仮住居へ移るとき**のほうです。40年以上の住まいに貯まった書類、本、衣類、雑貨を「捨てる」「保存」に仕分け、さらに「保存」は「**トランクルーム預け**」と「**仮住居に持参**」とに分けなければなりません。

2016年5月に仮住居に引越したのですが、本や道具の仕分け作業は寒が明けて早々から始まりました。本と資料は書斎、書庫、納戸をはみ出して寝室にも応接間にも累積しています。資料にも本にも、日常の掃除では取りきれないホコリがたっぷり。この間いつも、気管支がよくなかったのも無理はありません。

私自身は東京生まれの東京育ち、戦後はささやかなわが家にも財産税がかかったり、**新円の預金が封鎖**されたり、貧乏も経験しました。幸い家屋敷を売り払う前に豊かな時代が到来し、私は奨学金ももらわず大学へ進み、新婚時代は親からの相続分で一戸建てに住みました。地方から来て、自力で住宅取得した友人たちから「あなたは下駄はいて生まれてきてる」とうらやましがられたものです。

物書きと大学教師と二足のわらじで働いたおかげで、若干の貯蓄はあるし持ち家はあるし、私の老後は経済的にはまずは安泰とっていたのです。それが、先に書いたとおり、がらがらと崩れたのが70代半ば。家の中が水浸しになるほどの雨もりに見舞われました。屋根と壁の大修理で約270万円。月々の修繕費を積み立てていなかったのも、家計は大ピンチ。

家を持ったら「修繕積立金」を肝に銘ずるべきです。そうでないと、自慢の家は30年たつと金食い虫と化します。そもそも**ちゃんとした家を一生に一度建てればよい**、というのは、**短命時代の発想**です。木造住宅の耐用年数は**30年**なのですから。

私が老後の生活費に強気だったのは、有料老人ホームの入居一時金を賄える普通預金を持っていたからです。それは、私の老いと死への片道切符をいささか贅沢に彩ってくれるはずでした。家庭料理よりちょっと高級な食事、味見に訪れて確かめてあります。物置みたいな住まいからホテルとみまがう住環境へ。いつそこへ引越すべき心身の状況になるかは予測が付きません。そうなったとき、物を言うのが引き下ろし自由な普通預金です。**せめて人生最後の段階で少々贅沢させていただきましょう——**

結局、このお金が今回の建て替え住宅資金になりました。耐震性が最大の狙いですから、**軽量鉄骨のプレハブ会社の支払いに、虎の子の貯金が消えました**。

私はルビコン川を渡ってしまったのです。もう後戻りはできません。好きなとき、高級老人ホームにボンと一時金を払って入居する選択肢は消えました。体が弱ってもイヤでも今の家で地域の医療・介護サービスを利用して老いる、これが最も可能性ある進路でしょう。

年を

取って貯金が減ることは、こんなに心細いことであるか、というのが実感でした。現金で残すより自宅、それも娘と**2世代同居**のための不動産に替えるほうが、税制上も有利——。その程度の計算をしたうえで踏みきったことでした。理屈では納得したのですが、なんとも心細い思いを長く引きずりました。

私は77歳のとき胸腹部大動脈瘤摘

出という大手術で3個の動脈瘤を除去、人工血管との置換手術もしました。そのときは痛くて大騒ぎでしたが、私はあまり気にしないことにしています。なったものは仕方がない、…

80代半ばになり、朝起きてまず感じるのは、首が痛い、肩も膝も痛いこと。長年よく働き、70代には大手術を受けた体が悲鳴をあげています。

すべてが億劫で、一つのことをするのも大変。

誰もが最後は、家事サポートとケアがないと生きていけない。

◆わが友の認知症

2016年末、介護型有料老人ホームにいる中学の同級生を見舞ってきました。そのときすでに施設で4年。その3年前から認知症と診断され、本人も自分の病いを納得していました。夫は先立ち、子のないひとりぐらしの彼女を、3年間は近くに住む友人を中心に、私を含めて**中学の仲よし3人組**で見守ってきたこととなります。親戚への連絡も、ご本人が絶対に拒否でしたから。

最初に気がついた最寄りの友人は、**病院の受診をすすめましたが「私はなんともない」**。認知症の人の**家族が直面する最初の難関**です。友人はうまくその関所を越えました。「私ももの忘れがひどくて心配なのよ。おシバ（旧姓柴田の私）に病院を紹介してもらおうから、一緒に行ってよ」。結果は「アルツハイマー型認知症」。連れて行った友人の方は「ご年齢相応の脳」。幸いアリセプトという薬が効いて、医師への信頼感も強く、2年余りは無事に過ぎました。

しかし、服薬や通院が自己管理できなくなったのでしょうか。最も親しい友人にもマンションの扉を開かなくなり、生活の乱れが目につくようになりました。この段階で介護保険の申請や施設選びをすすめたのですが、すべて拒否。もともと他人から指示されるのを嫌う誇り高き才媛なのです。「事故があったら」と心配する友人に、医師は「施設入居には本人の納得が絶対に必要。事故は起こったら考えればよい」。乱暴なようですが正論には違いありません。

はたして事故は起こり、近くのファミレスで夕食後、自宅へ帰る道で転び、意識を失っているところを発見されました。この段階を経てようやく姪御さんに連絡を取り、本人も手術、リハビリ入院など素直に受け入れ、人が変わったように有料老人ホームへの入居もスムーズでした。幸い夫君の遺族年金などもあり、老後資金は心配ありません。今回の訪問でも、よく笑う朗らかなお年寄りになっていましたが、もう**私にだれかは全くわからず、ただ自分に好意的な人と感じて歓迎してくれた**ようです。その一方、成年後見人になって絶えず訪問する姪には、全幅の信頼を置き、関係性も完全に理解しているようでした。私たちも80代半ば、どうかこのまま平安な時間が流れていくように、祈るような思いです。